

「どうして、貴方が……」

突然現れた思いもかけない人物に淳は驚きを隠せず、思わず問うてしまう。雄二も「そうだ。何であんたが」と淳と同様のリアクションをしていた。

しかし、リアクションは同じであっても、その様子はだいぶ違っていた。雄二は白藤に対して敵対心を半端ではないほどに放っていた。以前、命のやり取りをしたことがある相手は何の前触れもなく唐突に現れたのだから仕方がないだろう。一方で淳は、白藤に対して敵対心を出していなかった。むしろ、その瞳に写っているのは恐怖の二文字であった。

足が震え、体は硬直する。極め付けに表情から簡単に彼がおびえていると察知でき、白藤は以前の彼とのギャップに少し戸惑ったが、その様子を外面にはおくびにも出さなかった。「むしろ私が聞きたいな。何故貴公等がここにいる？」

淳の様子についての考えをひとまず頭の隅に置き、白藤は会話を進める。それに対し雄二は「質問してるのはこっちだろ！」と怒声を浴びせた。

「そうか。ならばまずは私から答えよう。貴公らはここがどこかしらぬわけではあるまい？」

「そんなのしってるに決まってるだろ。ここは熱海……、まさか」

「おそらく貴公の考えている通りだ。私の家の別荘のひとつがここにあるのでな」

白藤はあたりを見回し、そして彼らも自分と同じことをしてきたのだと悟る。そして一瞬の間を空けた後「ここは人目がつきにくい。毎年ここで能力の修行を行っている」と答えた。

「どうだか。俺たちを襲いに来たんじゃないのか？」

「違う、といっても証明できる言葉を私は持っていないのだがな。信じるとは言わぬが、過度に警戒する必要はないとは言っておこう」

その言葉に対し、淳はすがるような声で「本当ですか？」と確認してきた。白藤は先のこともあり、淳に何があったのかと考えながら「私は君たちに敗れた身だ。故にもう二度と力によって自分の考えを一方的な押し付けたりはしない。君

と誓ったとおりに、「な」と話す。「君たちを襲うなどということも勿論しない」と付け加えて。その言葉をきき、淳はほっとため息をついたが、しかし雄二はまだ納得できないようだった。その様子を見て「彼は変わらないな」と心の中で苦笑しつつ、「だからこそ君たちに詫びをしたい」と申し出た。

「お詫び？」

「ああ。君たちも見たところ、私と同じ理由でここへ来たの
だろう？」

「さあ、どうだかな」

「隠すほどのことではないだろう。様子を見ればすぐに分かる。だから、その修行の手伝いを、私がやってやろうというのだ」

「はあ？ あんたが、俺たちを手伝う？ 何でまた」

「言っただろう。詫びだ、と」

「怪しすぎるんだよ」

思わず雄二は白藤に飛びかかろうとする。しかし、そこで彼のおなかからギョルルと音が鳴った。白藤の横にいた執事風の男がクスリと笑い、「まあ、立ち話もなんですし、ど

うでしよう、聡介様。お二人とお昼を一緒になされては」と提案して来た。「どうだ？　ろくな食事でありつけていないのだろう」と白藤が言ってきたため、かちんときた雄二は「んなわけあるかよ。今はたまたま昼の時間が近かったから……」と言ったところでまたおなかがなった。

「雄二、甘えようよ」

「ざけんな。コイツ、絶対毒盛ってくるぜ」

白藤との一件を思い出しつつ、淳は彼がそのようなことをするタイプの人間ではないと考えていたため、雄二を説得した。雄二も空腹にはさすがに耐えられなかったのか、「分かったよ。その代わり、おい、白藤。お前、俺たちが食べる前に毒見しろよ」という条件で承諾した。

白藤の別荘に着くと、二人はその大きさに絶句した。以前訪れた彼の家ほどのお大きさはなかったとしても、別荘という機能のみのためにここまで大きなものを持っているということが、彼らには信じられなかった。中に入っても、白

藤の家とほとんど変わらぬ豪華さであり、一番驚いたのは運ばれてきた料理であった。その見た目や料は想像していたものとあまり変わりはなかったが、味や食感、匂いまでもが今まで食べてきたすべての食べ物と比較しても比較しきれないほどに美味しいものだった。あまりにもいいにおいだったので、雄二も思わず運ばれてきた料理にすぐにかぶりつくほどであった。

「おやおや、そういえば毒見は宜しいのですか」

執事風の男は雄二がデザートを食べようとしたところで聞いてきた。雄二は「あつ」と一瞬ぼかんとしたが、しかし一口デザートに口をつけた瞬間、そんなことはどうでもよくなった。

すべての料理を平らげ、至福の時間の余韻に浸っていると、淳は違和感に気がついた。建物の外観、内観、飾られているもの、ここで働いているもの、そして出された料理。すべてが洋風のものであるにもかかわらず、白藤の服装だけが和服だったからだ。質問しようかどうか考えていると、白藤から先の案件について切り出してきた。

「それで、どうする？」

「どうするって、何が？」

「先ほど言った件だ」

「修行を手伝ってくれるという話ですか？」

白藤はゆっくり、そして優雅にコクリとうなずく。同じ動作でも、人が違えばここまで違うものなのかとどうでもいいことを考えながら、淳は雄二に「僕は賛成だけど、雄二は？」と聞いた。雄二はすぐには返答せず、悩んでいると、白藤が「私に手伝ってほしくないならそれでいい。だが、空腹になったとき、ここにすれば食事くらいは提供しよう」と申し出た。これに対し雄二は「なんでそんなことまでしてくれんだよ」と当然の質問をした。白藤は目を瞑り、答えようとしないう。数秒の間沈黙が流れると、執事の男は「ほれてしまったのですよ、貴方たちに」とにこやかに語った。白藤は「爺」と静かな声で怒鳴ったが、しかし執事は何食わぬ顔で二人に「だからこそ、貴方たちには貴方たちが必要となるほどの力を持ってほしいと聡介様は考えておられます」と続けた。とがめても無駄だと悟った白藤は「フン」とそっぽを向いた。

「雄二、だめかな」

雄二は肩をすくめ、「ちっ、分かったよ。俺の負けだ」と答えたが、「だけどな、白藤。これだけは覚えておけ。俺はあんたを信じたわけじゃない。俺が信じたのは俺の親友だ。分かったな」と白藤を指差し付け加えた。

白藤はまた「フン」とそっぽを向いたまま、「では30分後にまたあそこに向かおう」と二人に指示した。そして執事風の男に「やつも明日来るのだろう、やつにもこのことを伝えておけ」と言うと、品格を感じさせる足取りで食堂を出て行った。

当日の特訓は白藤が見ている中で淳たちが今までどおり特訓をするだけであったが、次の日からは様子が違った。やつと呼ばれた男が来たからだ。それは渚であり、彼もまた物質操作の能力をもち、さらに白藤とは違い目に見えるものを操るというために二人には参考になった。また、彼は以前弟子を取ったことがあったらしく、二人にさまざまなアドバイ

スをくれた。

本来、山籠り（とはいっても実際に山に籠ったのは最初の3日だけで、あとの日にちは白藤の別荘で過ごしていたが）は旅行に行く前日までの予定だったが、しかし旅行から帰ってきてからも二人は山籠りをした。白藤がそれを提案してきたからだ（と、言うよりも執事が提案し、白藤が許可しただけなのだが）。旅行から帰ってきてからの山籠りには勉強道具も持って行き、修行が終わった後に二人で宿題を済ませた。執事が二人で出来上がったところを見せ合ったほうが早いのでは？」と二人に言ったが、「ばっかだなー、爺さん。そんなセコイことしてたら女にもてないだろ」と雄二は笑いながら言っていた。淳も「できない量ではないですし、やはり自分でやったほうが力がつきますから」と答えたので、執事は「では、分からないところがありましたら是非私にお聞きください」と申し出た。「もつとも、大学教授をなさっている渚様にお聞きになったほうが宜しいかもしれませんが」

と付け加えた。この言葉を聞き、「渚さんて大学の先生なんですか？」と淳が質問すると執事は「ええ。だからお二方の修行に付き合うときもあれば、研究のために付き合えないときもあるというわけですよ」と返答した。

「へえ。なにやってるんすか、あのおっさん」

「地学でございます。この近くに宿をかり、学生さんと地質調査に来ているらしいですよ」

「なるほど。よし、淳。じゃあ俺たちも手伝いに行こうぜ」

この短い間で白藤たちと打ち解けた（というよりも白藤たちが信用にたる人間だと雄二が認識したといったほうが正確かもしれない）雄二は、手伝いを買って出ようとしたが、しかし「必要ない」と白藤の別荘にたまたま訪れていた渚に一蹴された。

時間は少しさかのぼり、淳たちが修行に出かけて5日目の朝。赤羽慎と二条優希は少し大きめのバッグをもって出かけていた。目的の場所は淳たちの修行の地であった。近くまで

は車で来て、そして車でいけなくなったあたりで徒歩となった。慎の能力で二人の位置は簡単に割り出せ、優希の重力操作のおかげで二人の足取りは軽かった。

「しかし、はらへったな」

「もうすぐお昼時だしね。もつとも、君の場合はさつきからそればかりだけど」

慎の眩きに対し、優希は突っ込む。それを意に介さず、慎は「ラーメン食いたいなあ」と続けた。

「ラーメンは持ってきてないよ。バッグに入ってるのはレトルトカレーとパックのご飯だけ」

「はあ、カップ麺もつてくればよかったな。どうせ淳と雄二がいるところなら食えるし」

「クスクス、まあね。でもカップ麺はかさばるじゃない」

「うー、でもなあ」

「ほら、そんな事言っていないで、早くしよ。きつと淳君も雄二君もおなかをすかせて待ってるよ」

「はっ。山籠りを許可したやつのセリフかよ」

「だって、水は淳君がいれば何とかなるし、火もあれば野生

の動物も寄ってこないし、もし万が一なんかあればすぐにどつちかが連絡するようになって二人に言っておいたじゃない。そうなる後は食事だけだよ。不安要素は」

「でもお前、なんかリスト作って二人に渡してたじゃんか」

「うん。でもね、山の中じゃあ炭水化物はなかなか取れないし、お肉も取れないよ」

「え、何で取れないんだよ」

「野生の動物って言うのは意外と捕まえられないんだよ」

「へえ、そうなのか。お、もうすぐみたいだぞ」

慎は手元の羅針盤（能力で出した二人の位置をサーチするためのもの）の反応で、二人が近いことを察知する。そして少し開けたかわらの近くに二人を見つけた。だがしかし、そこにいたのは淳と雄二だけではなかった。

「慎君、あれ」

「ああ、あいつは」

すぐに二人は臨戦態勢を取る。淳たちの近くに、あの白藤と渚、そして執事が立っていたのだから、それは仕方ない。

「どうする、すぐに打って出る？」

「いや、少し様子を見て……」

「誰だ、そこにいるのは」

隠れて様子を伺おうとする二人を白藤はすぐに察知し、にらみつける。

「お前、なぜここにいる？」

雄二と同じ質問をする慎に対し、弟子は師に似るものかと心の中で微笑し、しかしその様子をおくびにも出さずに「彼らを鍛えるために」と返答する。慎はその立ち振る舞いに思わず「そうか」と納得しかけたが「いや、いいわけないだろう」と自問自答し、「なんでお前がそんな事を、ここでやっているんだ」とにらむ。

「そのくだりはもう済んだのですが……」

執事のセリフに優希も「何が済んだのかさっぱり分かりません」と慎と同様ににらみつけた。

「ご理解いただけませんか？ この状況下から」

執事は両手を広げ、大げさに、まるで役者のように振る舞いながら「私たちが彼らを痛めつけているように見受けられますか？ いや、そのようには見えませんでしょう。それとも

彼らを操っているように見えましたか？ 仮にそうだと
して、私たちに何の得がありましたか」としゃべる。だが「て
めえ」とにらみ続ける慎に対し、白藤はため息をつき「なら
ばここで戦るか？ だがその場合、その二人にも被害が及ぶ
恐れがあると思うが？」と言葉をつむぎ、対して慎は「人質
かよ」と当然の言葉を返した。

しかして白藤はもう一度ため息をつき、「人質？ 何か勘
違いしていないか。私は彼らを傷つけるつもりなど毛頭ない。
だがしかし、ここで戦りあえば貴公の攻撃で彼らは傷ついて
しまうだろう？」とさも当然のことを何も知らない子供にわ
ざわざ教えなくてはならない大人のようにつぶやいた。

「俺が？ はっ、そんなわけないだろう。第一、どうしてお
前が傷つけない技術を持っているってのに、俺がその技術を
もってないんだよ」

「事実、であろう？」

「俺に負けたやつと言うセリフかよ」

慎のこの言葉にさすがにカチンと来たのか、白藤は「よか
ろう。ならば戦やろうか」と宣戦布告した。

「な、やめてください」

この状況はまずいと思った淳は止めに入ろうとするが、二人は聞く耳を持たない。そして白藤が日本刀を抜き放ち、慎が片手に漫画を持った瞬間、

「！：！」

大地震が起きた。

「淳、雄二！」

大地震が起きた瞬間、慎はすぐに頭を切り替え淳たちの安否を気遣い、冷静に二人のいる場所を見る。だがそこで見たものは慎には信じがたいものであった。

多数の葉や、砂利、埃や水しぶき。

否、それを舞わせている別の。

そう、風が二人を中心として球になるように渦巻いていたのである。まるで二人を守る城壁のように。少し考えれば分かる。白藤が慎が対応するよりも早く二人を守っていたのである。信じがたいこの光景であったが、しかし認めないわけ

にもいかない。やはり認めたくない気持ちもあり、それらが葛藤するその心を何とか静めて「白藤」とつぶやきかけたとき、「渚！」と怒声が響いた。

たった一瞬の間に大地震がおき、白藤が怒声を放ったため、その場にいた淳、雄二、慎、優希には理解ができなかったが、白藤は「どういうつもりだ、貴様」と怒鳴り続けた。

「そう怒鳴るな」

「今一度聞こう。何のつもりだ、貴様」

白藤が怒の感情を出しているのに対して、渚は一切の感情を消している。まるで白藤の怒声を気にもしていない。渚は「何のつもりか、か。まったくお前は」とひとつため息をついた。

「だがこれで落ち着いただろうか？」

「落ち着いた？ ふざけているのか貴様。これが落ち着いていられるとでも思っているのか！」

「いや、ふざけているのはお前のほうだ。赤羽と戦いあっても何の意味もない。お前の負けず嫌いなところは悪くはないが、それをいさめる心も持て」

「えつと」

今の会話で理解できたことを淳は「つまり慎先生と白藤さんが一触即発の雰囲気を出していたから、それをハプニングを起こすことによつてとめた、ということでしょうか？」と渚に聞いた。渚は「ああ、そんなところだ」とうなずき、もうひとつため息をつく。「要らぬ世話を」と悪態つく白藤にもう付き合いきれないと渚は淳たちに「そろそろ昼の時間だ。行こうか」とさっさと別荘に向かつて行ってしまった。

最初のうちはなかなか白藤と慎たちは打ち解けなかったが、しかし慎の人懐こい性格や馬が合ったなどの理由ですぐに仲良く話す仲になっていた。

「最近の政治家はさ、政治屋ばかりなんだよな」

「同感だな。だからこそ、自分たちの手で変えてゆかねばならん」

慎の問いかけに対しても最初はつれない態度をとっていた白藤も、徐々に彼に対して心を開いていった。

だからこそ、二人は淳たちを白藤たちに任せることにした。

「とはいっても5日くらいのを。ペースでくるよ。飯は美味しい

し」

「なんだ、貴公。ただ飯のためだけに来るのか？」

「いやいや、ここまでの運賃を考えると普通に飯食ったほうが安いって。だからそれはついでさ。ついで」

「ふっ、どうだかな。まあ気が向いたら来ればいい」

「おう。じゃあな」

慎たちを見送る白藤の後ろで雄二は淳に「まさかここまで仲良くなるとはな」と信じられない光景を見るように語ったが、「もともと似たもの同士なんじゃないかな。二人とも正義感がとっても高いし」と分析した。そんな二人のやり取りを見て、「そしてどっちも頑固だしね」と優希も割り込んできた。

自分のマンションに着いた慎は「つかれたー」と独り言を言いながらオートロックを開き、そして郵便箱のある空間へ向かった。そしていつもの習慣で郵便受けが空であることを確認しようとしたが、しかしその中には少しのビラと、一

通の手紙が入っていた。

「そうか。ようやく予定が決まったのか。しかし、豪華客船の上でかよ。ブルジョワジーといふかなんと言うか」

親友の一人からの手紙にすこし肩をすくめ、すぐに笑顔になった慎は「よし、寝るか」とエレベーターに向かったのだった。